

公開講演会記録

令和日本の往くべき道

— 岩倉使節団の眼で考える

NPO法人「米欧亜回覧の会」理事長 泉

三郎



① 巨大変化の時代を迎えて

私は、明治初年の歴史的壮挙「岩倉使節団の米欧回覧」に出逢い、以来半世紀近く「この旅の追っかけ」をしているものです。

今日は、当会理事でもある畏友の井出亜夫氏から「岩倉使節団を素材に、令和日本の行くべき道につき何かしゃべれ」とのご下命ですので、浅学菲才を顧みず、いささか所感を述べさせていただきます。

さて、明治5年つまり1872年前

後は、世界的にも大変化の時代でありました。英国に発した産業革命が世界中に大きな渦を起こし、その大波を受けて日本も維新革命を成し遂げ西洋的近代化に舵をとった歴史的な時期でありました。それから150年、令和5年を迎えた日本は、人類史上でも未曾有の巨大変化の時代に遭遇していると思います。その第一の象徴的な事象は、次々と起こる異常気象でありその及ぼす大被害の衝撃です。この3年半に及ぶコロナパンデミックもその気候変動に起因ありとされていますが、新型コロナは現代文明社会をグローバルなス

ケールで機能不全にさせたことはご承知の通りです。

そしてもう一つの象徴的な事象が産業革命以来の著しい近代化の成果と過剰文明の出現であり、さらに画期的なことは脳に代わる精密巧緻を極めた機器「コンピューターの発明」が加わったことです。それらが引き起こした情報革命の巨大波は、人類をして「神の領域」まで侵す異次元の時代に突入させることになりました。

こうした現状に対しわれわれはいかに対処すべきか。かつて黒船の襲来という世界的大変化に遭遇し敢然として

それに対応し近代国家をつくりあげていった明治創業世代の歴史、とりわけ岩倉使節団の群像の言動や営為は、必ずや何らかの示唆と知恵を与えてくれるのではないか、と思うのであります。

② 150年前の西洋文明と日本

文明

(1) 使節団の眼に映った「西洋文明」の姿は？

まず、使節団の眼に映った「西洋文明の姿」を瞥見してみましよう。以下は、使節団の公式記録ともいうべき久米邦武編『特命全權大使米欧回覧実記』からの引用です。

一つ目は、産業革命の先達、当時「世界の最盛を誇る英国」の回覧後の感想です。

「英ノ全国ハ黄金花ヲ結ヒ、百貨林ヲナシテ貴賤上下、悉ク皆昇平鼓腹セント、ソレ然リ豈ソレ然ランヤ、ソモソモ安楽ハ艱苦ノ結ビシ果ニテ、富貴ハ勉強ノ開シ花ナリ、英国ノ富庶世界ニ冠タルハ、ソノ人民ノ營業力(奮勵努力)他ニ超過セルニヨル、是ヲ以テ

之ヲ謂ヘハ、英国ニ住スルモノ、頃刻(しばらくの間)モ懶惰スルヲ得ス、曾テ聞ク、スペイン人ハ、終日睡ルヲ以テ業トス、又曰ク英人ノ足附ハ地ニ著止セスト」。

案内に立った駐日公使のパークスは「英国は欧州の片隅の瘦せた土地しか与えられずに働いても満足な産物が得られなかったので、地中から石炭と鉄を掘出して器械をつくり蒸気力で工業を興し富強をなしてきたのだ」と、気候にも恵まれ物産も豊かな日本との違いを強調し、使節は豊かで便利な暮らしを享受する英国人の姿を実見するのです。

二つ目は、当時「文明都雅の尖点」といわれたパリに関する記述です

一行はロンドンのヴィクトリア駅から列車でドーバーまで行き、海峡をフェリーボートで渡り仏の列車に乗り換えパリの東駅に着きました。そして馬車を連ねて市街に行く時の第一印象です。

「皚皚タル層閣、街ヲ挟ミテ聳ヘ、路ミナ石タタミヲシキ、樹ヲウエ、気灯ヲ点ス、月輪正ニ上リ、名都ノ風景、

自ラ人目ヲ麗シ、店店ニ綺羅ヲ陳ネ、旗亭ニ游客ノ群ル、府人ノ気風マタ、英京(ロンドン)ト趣キヲ異ニス」。

驚くべきことにパリは、ナポレオン3世とオスマン知事の見事なリーダシップの下に、約20年をかけて今日とあらかた同じくらいの素晴らしい「麗都」をつくりあげていたのです。宿は凱旋門に面する瀟洒な3階建ての迎賓館であり、窓からの眺めは「景色爽快ニシテ絵ノ如シ」でした。市中を回覧すれば「往クトコロミナ遊息ノ勝地アリ、街上ノ行ク人モマタ其ノ歩忙シカラズ、空氣清朗ニシテ、煤煙少ナク薪ヲ以テ石炭ニカエ、……」とあります。ロンドンではスモッグの中を車馬喧噪し人々は足が地につかないほど忙しげに歩いていたのと実に対照的です。パリの街は、訪ねた日々がクリスマスの時期だったこともあり、とりわけシャンゼリゼ界隈はガス灯が玉を連ねたように輝き、音楽堂には楽師がそろって軽快な音楽を奏し、人々は抱き合って楽しげに踊っていました。ルノワールのムーラン・ド・ラ・ギャレットの絵そのままの風景が展開していたのです。

久米はその仏国の美的な豊かさに目を見はり、「文明が進むとは、食、衣、住の順序で豊かさが進み、求める重点が量より質に変化する、より贅沢に美的になっていく」といい、「パリは天国のようだ」と感嘆しました。そして、「倫敦（ロンドン）ニアレハ人ヲシテ勉強セシム、巴黎（パリ）ニアレハ人ヲシテ愉悅セシム」と書き、英仏の文明の成熟度の違いを鮮やかに描き分けています。

三つ目は、『回覧実記』の第五編にある「欧羅巴洲政俗総論」において東西文明の比較を行っている箇所です。久米はズバリ「白種ハ欲深キ人種ナリ、黄種ハ欲少キ人種ナリ」であると断言します。個々人は「私利ヲ営求スル一意ニテ、生業ニ勉強シ十分ニ遂ゲン事ヲ必ス」とあり、国家の目指すところも利益とその保護を大事にする「町人国家」である、といます。それに比べ日本は「利益を追求するのは下位の目標であり人格陶冶をこそ上位に置く」「道義国家」である、という認識なのです。岩倉使節団のメンバーが文明度の仰ぎ見るような格差にもめげず、意外な

ほど「堂々としていた」のは、「徳義」を大事にする日本国の方が町人国家より高尚だとする自負があったからだと推察されます。

（2）欧米人の目に映った、幕末維新期の日本文明

翻って維新前後の日本はどんな文明だったのでしょうか、幕末や明治期に訪れた欧米人の目にどう映ったか。いくつかの例を渡辺京二氏の『逝きし世の面影』から引用させてもらいましょう。

1856（安政3）年米国の初代領事ハリスは伊豆の下田に駐在し、その界隈の風景をこう描写しています。

「人々は楽しく暮らしており、食べたいだけは食べ、着物にも困ってはいない。それに家屋は清潔で、日当たりもよくて気持がよい。世界のいかなる地方においても、労働者の社会で下田におけるよりよい生活を送っているところはあまい」。

ハリスは世界各地を歩き回っている商人の出であり、南国下田界隈の暮らしぶりをそのように観察したのでした。

1872（明治5）年法律顧問とし

て4年間在日したフランスのブスケは、日本人の生活を見て「必要なものは持つが、余計なものを得ようとは思わない。（仕事のあいまにも）たばこをふかし、しゃべったり、笑ったりしている。一家を支えるにはほんの僅かし（金は）いない」のだと診断しました。

1877（明治10）年に東京を訪れた米国の生物学者E・S・モースは、「錠をかけぬ部屋の机の上に、私は小銭を置いたままにするのだが、日本人の子供や召使いは一日に数十回出入りしても、触ってならぬ物には決して手を触れぬ」といい「隅田川の川開きを見にゆくと、行き交う舟で大混雑しているにもかかわらず、「荒々しい言葉や叱責は一向聞こえず」、耳にするのは「アリガトウ」と「ゴメンナサイ」の声だけ」だといい、このような優雅と温厚の態度は「下流に属する労働者たちの正直、節儉、清潔その他」を表し、「わが国のキリスト教徒的と呼ばれるべき道徳」をすでに身に着けている証しだとして感嘆しています。

1889（明治22）年来日した英国

の詩人、エドウィン・アーノルドは上野の精養軒で開かれた歓迎晩餐会でこう述べています……「景色は妖精のように優美で、美術は絶妙であり、その魅力的な態度、礼儀正しさは、謙譲であるが卑屈に墮することはなく、天國あるいは極楽」にもっとも近づいている国である」と。

そして会場のゲストたちにこう語りかけました。

「あなた方の文明は、隔離されたアジア的生活の落ち着いた雰囲気の中で育ってきた文明であり、競い合う諸国家の衝突と騒動のただ中に住む我々に対して、命をよみがえらせるようなやすらぎと満足を授けてくれる美しい特質をはぐくんできたのです」と（太字は筆者）。かなり褒めすぎのようですが、このような感想を述べるには、それ相応の現実があったのだと思います。

では、150年後の令和日本の文明はどうなったのでしょうか……。

③ 令和の日本文明、その現況は？

（1）モアモア文明の果て、「溢れかえる豊かさと便利さ」

久米邦武が令和5年の日本を訪ねたとしたら、どう感じ、どう思うでしょうか。

現代日本の姿は、西洋近代の文明が巨樹の如くバベルの塔のように聳え立っているように見えるかもしれません。

大樹は無数に大小の枝葉を伸ばし、そこには爛漫と花が咲き、見事な果実が鈴なりになっています。都市の景観はすっかり欧米化し、街を往く人々もすっかり西洋化しました。とくに若い人たち、戦後の教育を受けた世代は、アメリカ文明の影響に色濃く染まり、容姿、言葉遣い、考え方もすっかり米国風となり、個人の欲望追及に「一意専心」し、あからさまに「快楽を求めて」恥じることはありません。久米は、その経済的、物質的、外面的繁栄に驚嘆すると同時に、精神的、心情的、内面的な劣化、日本の美風、礼節の欠如、道義の低下にさぞ落胆するであらましよう。

顧みれば、明治日本は、あからさまな弱肉強食の帝国主義時代にありまし

た。明治日本にあっては「独立」の確保が最優先の課題であり、使節団の面々はその学習結果を踏まえひたすら富国強兵策に挺身し、約40年で大国ロシアの南下政策を阻み、幕末以来の宿痾ともいべき不平等条約の改正にも成功し「独立」を全うしました。

その後の40年はどうでしょうか。前半の20年は欧州戦争で漁夫の利を得たこともあり民の生活もようやく潤い文化も享受できるよき時代を迎えました。しかし、それは長続きせず、後半の20年では三代目の属性ともいうべき自惚れや怠惰、身のほど知らずの野心にとられ、現実を直視することを忘れました。そして無謀な戦争を仕掛け、その果てに超大国の米国とも戦う破目になり、亡国寸前の大敗北を喫したことはご周知の通りです。

そして米国の占領下、GHQの絶対権力の下で未曾有の大改革がなされ、軍事を捨てて経済産業の発展に一途に進進しました。そして40年、日本人は実によく頑張りました。そして奇跡的といわれる経済成長を遂げて、人々の

生活はすっかり豊かになり、すっかり便利になりました。1985年、日本はその繁栄の頂点にありました。鉄と自動車の生産は世界一となり、輸金額は絶好調で対外債権の所有国としてもトップに躍り出ました。富の配分も概して公正で中産階級が厚く消費力は旺盛で一般の民も「豊かで便利な生活」を享受できるようになりました。それは明治維新以来求め続けてきた「平和と民富の国」を実現できたことを意味しました。

思い起こせば1867年、英国の経済学者スタンレー・ジェボンズは、英国の繁栄ぶりを次のように表現しました。「石炭と鉄の基礎の上に建てられた豊かなイギリスの商業は、世界の国を相手にしている。北アメリカとロシアは我々の穀物畑であり、シカゴとオデッサは我々の穀倉である。カナダとバルト海沿岸地方は我々の森林であり、オーストラリアは我々の綿羊牧場であり、南アメリカは我々の牧牛場である。ペルーの銀、カリフォルニア、オーストラリアの金は、こぞってロンドンに

流入する。中国人は我々のために茶を栽培し、コーヒー、砂糖、香料は東インドの栽培地からやってくる。スペインやフランスは我々の葡萄畑であり、地中海沿岸は我々の果樹園である」と。1987年、奇しくも120年後、ある日本人はその繁栄ぶりをこう書きました。

「今や日本は世界を相手にしている。アメリカは我々の穀物畑であり、オーストラリアは我々の鉄鉱山であり牧羊場である。カナダは我々の森林であり、ペルシヤ湾岸諸国は我々の油田である。ブラジルは我々のためにコーヒーを栽培し、台湾は我々のためにバナナをつくり、世界の海は我々の漁場である。そして、パリ、ローマは言うに及ばず、エジプトのピラミッド、中国の万里の長城も世界の名所旧跡はことごとく我々の観光地である」と。

しかし、日本経済はそれが頂点であり、その後は金融バブルが続きそれが破裂して、以後は国もまるごと借金依存のローン体質となり、お気楽な「3代目的ユーフォリア生活」を続けて30

年が過ぎようとしています。

その光景は、コンビニやショッピングモール、百貨店を一覧すれば一目瞭然です。食品をはじめ、衣料、家具、什器、実用品から贅沢品まで溢れるように並んでいます。そして各家庭、各個人の暮らしを見れば、最新型のテレビやスマホから奔流のようにあらゆる情報が間断なく放出されています。そしてお笑いや歌謡番組、スポーツや旅、それに金融商品や健康・美容関連商品などのコマーシャルの氾濫、あってもなくてもいいような商品やその宣伝の洪水でアップアップの日々が繰り返されています。

(2) 度が過ぎると、モノみな悪になる

しかし、あまりに豊かになり、あまりに便利になると、ある時機を境に効用はマイナスに転じてしまいます。人体に例えれば、過食・過飲になるとそれがぜい肉となり肥満となり臓器の負担になって諸病の元になる道理です。ご覧ください。街も住まいも、文明の果実、グルメ、ファッション、各種の贅沢品、そして諸々の便利な文明の利器・

雑器類でどこもいっぱいです。30年も前、我々戦前生まれの世代は、「もう必要なものはそろったね、これ以上ほしいものはないな……」とつぶやいたものです。その後世の中は、「モアモア進歩、モアモア成長」を唱えて「これでもか、これでもか」と新商品や新サービスの制作に精を出し、しきりに忙しがって暮らしてきたのです。

その末に、現代人はストレスがたまり心身ともに不健康になる……「おつかれ」と「いやし」が日々の挨拶となりました。「忙」とは「心を亡くす」と書きます。人間は本来もっていた大切なものを亡くし生来備わっている能力や感性さえ劣化させてしまうのです。フランスの生理医学者でノーベル賞受賞のアレクシス・カレルは、こう言いました。「人間は、もう現代の文明についていくことはできないし、文明が進めば進むほど人間は退化していく。であれば、文明が果たして人間を幸福にしているのか、不幸にしているのか、はっきり見極める必要がある」と。

④ モアモアから適適へー知足適欲・ほどよい加減

では、文明とは何か。近代化とは何か。明治より150年、戦後だけでも77年……我々がずっと目指してきたものは何なのか。「迷ったら原点に返れ」と言います。ならば源流に回帰してゼロベースで考えてみましょう。

(1) 文明は何のため？ すべて幸福のための道具ではないのか

科学技術文明、資本主義文明、その進歩・発展は、目的ですか？

美術や音楽などの文化、キリスト教や仏教などの宗教は、どうですか？

いずれも、目的ではありませんね。

どれもこれも道具・方便であって目的ではない。目に見えるハードなもの（文明？）、目に見えないソフトなもの（文化？）、大きなものも小さなものも、すべては幸福のためのもの、人為人工のものです。それらはすべて自然にあったものではない、人間が創り出したものです。文明はものすごく

進歩発展して目もくらむばかりに巨大で膨大になりましたが、それは主人ではなく、人間の道具、召し使いでしかない、最新流行のAIもしく、単純に道具でしかないのです。

(2) 「幸福とは何か」、たった五つあればいい

では、目的の幸福とはいったい何か。古今東西、多くの人がいろいろのことを言っています。しかし、真実はごくシンプルなものではない。突きつめていくと、「幸福には五つの要件があればいい」ことが判然としました。

典拠は二つあります。一つはもっとも長い歴史をもつ中国の知恵（『書経』）であり「五福」という考え方です。長寿、富裕、健康、徳を好むこと、天命を全うすること、の五つです。もう一つの典拠は、最新の超大国米国の知恵、つまり「データ」からの抽出ですが、いかにも米国らしいですね。代表的調査会社であるギャラップの膨大なアンケートの結果（well being のデータ）から五つに集約されたものです。情熱をもてる仕事、好ましい人間関係、安定した所

得、健康、地域社会への貢献……です。

この二つは、いずれも5項目、表現は違いますが中身はほとんど同じだと思えます。同じ人間なので当然といえば当然です。私はその5項目に少し手をいれて次の五つにまとめてみました。

それは、仕事、家族・仲間、日々の生活、健康、お金の五つ、です。この中で異色なのは日々の生活かもしれませんが。その典拠は中国生まれの米国の文明批評家林語堂^{リンユータン}の「The Importance of Living」(坂本勝訳『いかに良く生きるか』)です。

いずれもごく常識的なことでありシンプルです。余計なものには必要ではないのです。

(3)「適適」こそ、幸福へのマスターキーではないのか？

さて、問題はこの超過剰文明時代に、いかにして幸福をつかみ取るか、です。物や情報が氾濫する中で何を基準に選んだらいいのかわからなくなっているからです。そこで「モアモア」に代わって思いついたのが「適適」というフレー

ズです。漢和辞典を引くと、「適」の1字からはゾロゾロと熟語が出てきます。

中でももっともわかりやすいのは「適量」でしょう。毒も適量飲めば薬になり、薬も過剰に飲めば毒になります。匙加減一つで善にも悪にもなる。温度もそうですね、いい湯だなと言えるのはよい加減の温度です。運動も適度にやれば健康によく、過ぎれば体をこわす。「適性」もわかりやすいですね。相性のよさは極めて大事です、恋人や伴侶選びはむろん、人付き合い全般に通じます。仕事や趣味のケースも同じです。その調子で挙げていくと……。

適材適所、適時適量、適用適中、適当適切、適心適意、適正適格、適性適合、適宜適度……、適応範囲はまことに広い。

しかし、その中でも特に重要な「適」があります、「適欲」です。モアモア文明の過度の進展は、人類史上に比類なき過欲を生みました。それは貪欲であり、資産や所得の大格差であり、今や世界的に最緊要の課題となっています。その不満が怨恨、憤懣、怒りを生

み、テロ、暴動、争乱、戦争を惹起させるからです。今こそ「貪欲から適欲へ」、「GDP(量)からQOL(質)へ」、そして「生産から分配へ」「モアモアから適適へ」、個々人の価値基準や社会のパラダイムを大転換をすべき時に来ていると思うのです。

⑤ 日本文明の歴史には、「新たな地球文明」に最適な「知恵」がある

(1) 徳川文明の長所(エッセンス)を現代文明に注入すべし

徳川文明には厳格な身分制や鎖国など各種の短所もありましたが、少なくとも二つの長所がありました。一つは、先述したような個々人の生き方として、余計なものは求めない、腹八分目の、身分相応の「知足適欲」の考えが浸透していたことです。二つは、社会の規範として協調融和主義をとり闘争征服主義はとらなかったことです。

それは大自然に対しても同様で、西洋文明のように挑戦的に自然を征服しようとは考えませんでした。自然に順応

し謙虚に生きようとなりました。幕末の蘭学の拠点の一つありました。東は佐倉の「順天堂」であり、西は大阪の「適塾」です。佐藤泰然は「天に順う」という意味で「順天」を掲げ、緒方洪庵は「適適」の意味でこれを掲げました。

それに比べ西洋発の近代文明は、天をも征服し、トコトン追及してやまない主義です。そこで進歩や成長一本やりとなり、森林や各種資源の収奪が過ぎ、膨大なごみをまき散らし、地球そのものが悲鳴をあげるまでになりました。

ロケット博士といわれた糸川英夫さんは、数十年前にもこう言いました。

「かつて人間は宗教の束縛によって精神の自由を奪われていたが、現在人類は再び自らのつくった呪縛によって危機に瀕している。その呪縛とは何か。テクノエコノミーという価値観である」と。

現代社会に住んでいる人は、中世と違って宗教の支配からまったく解き放たれ、「自由の世界」を遊泳していると錯覚しています。が、実は「技術と経済」という現代の宗教の信者になってしまったのではないですか。技術への信仰、

経済への信仰、これが手をつないで人間をふりまわし、豊かに便利にはしてくれましたが、一方で母なる自然を破壊し地球の微妙なバランスを崩し、人間性そのものを劣化させ機械化しているのではないですか。今こそ、テクノエコノミーという怪物、疑似宗教「技術の進歩と経済の発展」という呪縛から自らを解放しなくてはなりません。

ところで、明治初年の人々は「文明」をどう考えたのか、振り返ってみましょう。

福沢諭吉は「文明とは衣食を豊かにし、人品を高尚にすること」だといいました。

西郷隆盛は「文明とは道の普く行われることであって、宮室の莊嚴、衣服の美麗、外観の浮華をいうにあらず」といい、「敬天愛人」を唱えました。

豊かさの他に福沢は「人品の高尚」を挙げ、西郷は豊かさより「人間としての道」を求めました。人品とは人としての品格、道とは人の道、道義・道徳のことです。

徳川文明は、東海の孤島に育まれた

文明でした。それは限界社会であり、その中で生きる知恵として自然を崇敬し人の和を大事にしました。そして経済面では生産と消費の循環を尊び、治安については当時最新兵器であった鉄砲を捨て刀の時代に戻りました。そして260年の平和な生活を享受したのです。

現代の地球は交通通信機関の驚異的な発達により地球そのものが小さい限界社会となりました。今や人類はひとしく「宇宙船地球号の客」であることははっきりと認識すべきです。そして徳川文明の知恵から学ぶべき時だと思っています。

日本には明治以来今日まで、その伝統が伏流しています。渋沢栄一は『論語』を、稲盛和夫は「利他主義」を、原丈人は「公益」を経済の上に置きました。いずれも西洋的貪欲の闘争主義から東洋的適欲の融和主義への道です。人類の生きる道はそれしかないと覚悟すべきでありましょう。そして日本はその先頭に立ってこの思想を主唱し、主導すべき位置にあるのではないか、

というのが私の直観です。

（2）地球文明の夢、「天地人和楽」の世界

さて、日本にはその思想をもっとわかりやすく説いた人物がいました。

元禄時代を生きた思想家、『楽訓』や『養生訓』で著名な貝原益軒です。

その益軒先生は、「天地和楽」と言いました。「天地」とは「大自然」というべきでしょう。横文字でいえば「グレートネイチャー」でしょうか。

科学技術がいくら進歩しても、天地にあるものはなお不思議だらけです。人体一つとってみても、60兆ともいわれる細胞からできていて、それぞれが複雑に機能分担しながら、実に巧妙に精緻に生命を維持しているのです。

それを創り出し差配しているのは誰ですか。古来、人はそれを「神」といい、「天」といい、「サムシンググレート」とも呼んでいますね。その偉大なる創造主を敬い謙虚にその知恵から学ぶことがもっとも大事なことはありませんか。それを「天と地と和み楽しむ」と表現したところに益軒先生の深

遠な叡知があると思います。私はそこに人も加えて「天地人和楽」としてみました。現代の「SDGsの思想」にも通じますが、日本語版とすればより簡潔でわかりやすいと思いませんか。

ここまで文明の大樹が育ち、未曾有の豊かさを実現できた現代では、配分さえ適正にすれば、かつてのような、奪い合い、争い合い、殺し合うことはなくて済むのではないのでしょうか。今こそ、「天と地と人」が、互いに和み合い楽しみ合う「妙境」へ、互いに響き合う「交響の世界」へ進むべき好機だと思います。

久米邦武は晩年、東西文明を比較考量して「超然とこの一球世界」に通じる「一視同仁の博愛」や「宇宙・生命」のような価値観を模索していました。それは「天地人和楽」の思想に通じるものではないかと思えます。

岩倉具視、木戸孝允、大久保利通、伊藤博文らも、同じように考えたのではないのでしょうか。確かに150年前、西洋の技術産業文明は積極的に摂取しようとした。が、一方では一神教

のキリスト教や利益追求一辺倒の思想に拒否反応を示し、八百万の神を認め、仁愛を尊ぶ「日本の美風」をこそ懸命に保守しようとした。

令和の日本は、この人間蘇生の大事業、「新たなルネッサンス」を立言リードして、このかけがえのない青い地球が「天地人和楽の妙境」になる日を、身を挺して希求すべきではないでしょうか。私はナイーブな少年のようですが、みなさんのお考えはいかがでしょうか。

（2023年6月29日・公開講演会）

筆者略歴（いずみ・さぶろう）

著述家、岩倉使節団の研究者、NPO法人「米欧亜回覧の会」理事長。

1935年生まれ、一橋大学経済学部卒（坂本二郎ゼミ）。

著書に『堂々たる日本人』『岩倉使節団』『岩倉使節団という冒険』『伊藤博文の青年時代』『青年・渋沢栄一の欧州体験』など。編著に『岩倉使節団の群像——日本近代化のパイオニア』。